

みんなで人権^{じんけん}を考える「つなぐ」 TUNAGU II

そのだ ひさこ

「TUNAGU II」とは

人と人、心と心をつなぐ、世界とつなぐ一人権尊重のまちづくりの一環として、さまざまな人権問題について市民の皆さんと共に考えます。

「背中」の年賀状

今年も数十枚の年賀状をいただいた。数年ぶりに、懐かしい名前の年賀状があった。ある私立大学で20年近く、「人権・部落問題論」を講義した教え子の一人、Mさん(男性)だった。うれしくなり、すぐ裏返してみた。一瞬、その写真にわたしは釘付けになった。そこにあったのは、Mと連れ合いさんとその真ん中の子ども、3人の背中(後姿)だった。何という! 「先生、元気か?」と書いてあったが。はじめてもらった背を向けた年賀状。その「背中」の意味を一瞬で私はこころ裂かれる思いでのみこんだ。すぐ電話して声をきいた。懐かしく元気な声だった。お互いに「会いたい、会いたいね」と長電話をした。卒業してとくに、20年近くがすぎた。

Mは在学中の部落問題の講義のあと、後ろの席からすたと私の前まで歩いてきて「先生、俺は今、結婚差別の真ただ中やが!」といった学生である。その後、私は彼の話を聞いた。高校時代からつきあっている彼女だが、部落差別のいわれのないことなどをとんなに懸命に話しても、彼女の母親が絶対に反対であること、Mが電話するとガチャン!と切られてしまうこと

など。在学中何度もMとは話をした。ついに、彼女にも会いたくなくなって、新幹線に飛び乗って会いに行った。とてもにこやかで、素敵な彼女だった。二人から結婚の相談もあった。「10年もあなたについてきてくれた彼女のためにも…」くらいいしか言えなかった。数年後、Mは結婚したが、母親は決して許すことは無かった。それは孫ができた今でも。Mは今、子どもに恵まれ3人で暮らしながら、ある地域の部落解放運動を頑張っている。

彼女の母親は多分、私と同世代かそれほど変わらない年齢だろう。部落問題が教科書に載ったのは1972年であり、「解放令」から101年後のことである。したがって、私のような60代以降の高齢者たちは小、中、高、大学と一度も教育によって部落問題について習っていない世代である。一度も学んでいないということはただ「無知」というだけではない。誤解を恐れずに言えば、江戸時代から続いてきた偏見や、間違った知識が自然に刷りこまれているということに他ならない。

3人の「背中」の年賀状。その「ノン」の強い意志と哀しみの深さを、私は決して忘れることは無い。

問 教育政策課

人生の大きな節目に

同和問題の解決は、国民的課題と言われています。その解決のために2016(平成28)年に「部落差別解消推進法」が制定されましたが、この法律ができる過程の中でも、結婚差別が現存することが挙げられています。2021年の福岡県民人権意識調査の「同和問題の中で人権が特に尊重されていない出来事は?」との問いに「結婚問題で周囲が反対すること」という回答が一番多く約60%もありました。

結婚や就職は、人生の大きな節目です。その節目で、苦悩する人々をつくっているものは、社会の中にまだ存在する差別意識です。日本国憲法に保障された「結婚は両性の合意によってのみ成立する」という条文のめざすものが何であるか、私たちは同和問題における結婚差別を通して、愛情、結婚、家族というものについてより深く考えていきたいものですね。

筑紫野市人権尊重の
まちづくりスローガン

自分が人からされたり、
言われたりして、
いやなことは
自分は人にしない、言わない

平成29年度筑紫野市総合教育会議にて、子どもにも大人にも理解でき、実践に移せるスローガンとして決議されました。